

# 「松代におけるまちづくりの未来 —アート・建築・人と人との関係づくり—」 シンポジウム記録及びその考察

村 木 薫

日 時：平成24年9月1日（土）pm3：00～7：00

場 所：松代商店街周辺及び松代駅前ふるさと会館2F

主 催：NPO法人越後妻有里山協働機構

概 要：当日午後3時から4時半まで松代周辺のまち歩きを行い、その後参加者全員でシンポジウム会場である松代駅前ふるさと会館に移動し、「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」関連企画シンポジウムを行った。

## 1 まち歩き概要

ほくほく線松代駅に午後3時に集合し、松代商店街周辺のまち歩きを行う。参加者は鳥取大学の学生、長岡市役所職員、地域の方々など総勢30名ほどであった。松代駅より、関谷正義さんらと一緒に出発し、河岸段丘の高台を登りながら、松代独特の土壁と板張りでできた在来工法の家並みを見ることができる。商店街には見られない明治、大正期に建てられた生活感の色濃く残る風景が印象的であった。途中から高



写真1 松代周辺まち歩き風景

橋嵩一さんに入ってもらい、私の修景プロジェクトの行われた家々の現状を見て回った。また、河岸段丘に沿った街並みや、22件の旅籠が集まったかつての宿場町として栄えた理由を聞きながら、その後大正9年の大火による道路の拡幅により、現在の街並みが形成されたことなどを知ることができた。途中、「日の出そば」でお茶をいただき、「松代古道」の道しるべを見ながら、「茶もっこ処おらこ」で郷土史家の鈴木益蔵さんから今ほど歩いてきた商店街の成り立ちや現在の過疎化の状況をお聞きした。残念ながら松代の大火後に

作られた大正時代の建物は数少なくなっているが、当時の写真より割り出される在来工法で造られた古い建物があるため、それらを核にした家並みの修復をこれからもやっていきたいと感じた。後藤先生は、まだたくさん修復できる家はあるという見方を示してくれた。小泉先生は土壁で修復した家と今回初めて育てている蕎麦の花に着目し、これらの行為全体を修景プロジェクトとしてとらえることや、特に人・モノなどの関係性の回復にアートとしての役割があるという視点を与えてくれた。富澤先生は、松代の未来構想の中で、里山文化の掘り起こしと様々な人の交流で松代の人々の意識が変わることに期待し、実は松代の周りにある里山全体がフィールドミュージアムになりうるという構想を語ってくれた。

## 2. シンポジウム概要

場 所：松代ふるさと会館 2F

時 間：pm5：00～7：30

(各事例報告20分×4人+ディスカッション20分+質疑応答20分)

シンポジウムパネリスト

1. 後藤哲男（長岡造形大学建築・環境デザイン学科教授）
2. 富澤恵子（津南町教育委員会嘱託指導主事）
3. 小泉元宏（鳥取大学地域学部地域文化学科准教授・シンポジウム司会）
4. 村木薫（新潟中央短期大学教授・アーティスト・今回のシンポジウムの話題提供者）

合計120分の予定で行われる予定であったが、全体で30分ほど伸びてしまった。

村木、富澤、後藤、小泉の順に各自のテーマに沿った事例発表を行い、村木の松代における2000年から行っている「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」の実践報告を基に土壁プロジェクトの意義、反省点などを各分野からあぶり出すことにより、現在「大地の



写真2 シンポジウム風景

芸術祭」の会場として関わっている松代地域の課題や未来に向けた方向性を参加者全員で考えるきっかけの場とすることが目的であった。協働プロジェクト型のアート活動の重要なポイントである「人と人との関係づくり」という副題について各発表者のテーマの内容が多岐に渡り、報告時間が長くなってしまった。しかし、ここでは、各自の研究テーマに沿っ

て様々な立場からの意見を交換し、議論することで次へのステップにつながる事が重要なことであり、会場の参加者全員が各自の立場で、今後の課題を探し、これからの地域社会のあり方に思いをはせ、何らかの行動に結びつけてくれることが最大の目的でもあった。

事例報告後の意見交換や参加者からの質問の方向性も自ずと広がり、嬉しい誤算でもあった。反省としてテーマが絞り切れず、2時間半のシンポジウムとなった。しかし、アートや建築などのものづくりの可能性・方向性について、その関わる土地の歴史や風土性を土台として考えるプロジェクト型のアートの意義は認めながら、今後の松代におけるアートシーンの制度構築、住民の参加状況、少子高齢化という地域の現状など、今後の課題も同時に見えてきた。また、日本大学芸術学部の鞍掛先生と学生たちも途中から参加して、星峠集落に展開しているサイトスペシフィック型のアートプロジェクトの現状報告を聞かせてもらった。私の関わっている松代商店街の状況と共通の課題を感じることができた。また、会場から東日本大震災の被災地で報道を行っている若者から、被災した現地から立ち直るために何が有効で、何が可能なのか、また大地の芸術祭のようなアートトリエンナーレが有効なのかどうかという問題提起がなされた。これに関する議論は時間切れとなってしまったが、今後のアートシーンを考える象徴的な意見交換ができたのではないだろうか。

総括すると、参加者がアートを核とした様々な取り組みを考えるいい機会になったと思われる。アートが特別な存在ではなく、「松代における土壁による修景プロジェクト」という作品制作のあり方は、将来の不安や疑問に対する提案でもあり、アートの機能の再確認と今後の松代地域のアートシーンの方向性のひとつとして議論できたのではないだろうか。また、「まちづくり」という視点から、今後のアートシーンを支える制度のあり方や問題点も同時に見えてきた内容であった。

### 3. シンポジウム記録

(記録内容は4人のパネリストの話した内容を収録したものを再現したものである。)

#### 村木

ただいま紹介にあずかりました村木です。今回のシンポジウム全体のテーマを「松代におけるまちづくりの未来」と題して、最初に私の方から2000年から松代において実施してきた内容に沿って報告したいと思います。また、副題は「アート・建築・人と人との関係づくり」としました。私の立場から「松代町商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」の概要報告を行い、後藤先生から建築という切り口で、そして富澤先生、鳥取大学の小泉先生からは「アートの概念の拡張」及び「人と人との関係づくり」という視点から話が進行していくのではないかと考えています。

2000年に大地の芸術祭の第1回目が開催されるのですが、そのための現地下見として、1999年の春に設置場所である松代町商店街周辺を初めて歩いてみました。彫刻を専攻し、

当時から土壁を使った彫刻を作っていたので、最初、松代保育園から商店街にかけて土壁で作った卵風のオブジェを街並みの通り沿いに並べてみようかと考えたのです。

しかし、どこかの芸術祭のようにその時だけのお祭り騒ぎとして一過性の彫刻作品を作って決められた場所に置くということに強い疑問を感じていた時期でした。そうではなく、この地域とどれだけ深く関われるのかという率直な疑問がありました。様々な街や駅前、公園などに置かれているモニュメントをみると、はたしてこのモニュメントはここになければいけないのか、この地域に住んでいる人たちに親しまれ愛されているものなのか、また設置された必然性とは何かという疑問から今回の芸術祭で作る作品はちがうコンセプトを持たせたい、長年の疑問の解答に少しでも近づけられるような作品にしたいという思いがありました。

本日も松代商店街のまち歩きをする中で気付いた方もいらっしゃるかと思いますが、周辺を歩くなかで圧倒的な里山風景、棚田、そしてなんととっても豪雪地域独特の太い柱と梁で組み立てられ、軒の出が深い「せがいで造り」の家並みが作り出す独特の風情があります。また、大自然が作り出した造形美、あるいはこの地域で格闘しながら作り出してきた棚田や家並みの美しさなど、やはり厳しい自然と人間が生活しなければ生まれない関係から出来てきた造形の存在感に対して、私一人の手で作った作品などは到底敵わないと感じました。だったら、この風景の中に溶け込む美を見つけて表現してみようと思いました。たまたま、土壁という技法で造形表現をしていましたので、この技法を生かした造形を継続して家並みを作っていこうと考えました。

そして、この地方独特の家々が持つ在来工法による家並みの美しさを掘り起こし、現代のデザインを施しながら10年間継続して修復することで、街並みが整えられ、他にはない風景が現れるのではないかと思ったのです。また、この土壁をベースにした修景プロジェクトを地域の人たちと協働で行うことで、地域から参加した人や都会から観賞に来た人の中から、都市化によって失くした様々な関係性の気づきや掘り起こしができるのではないかと漠然と考えていました。

そのような「出会いの場づくり」という意味合いもあり、2000年の第1回大地の芸術祭では、たまたまのある松代地域に特有の在来工法で建てられた住宅を探しました。そこで、大地の芸術祭で最初から協力的な関谷幸一郎さんとそのお宅に出会いました。そして、私の考えていることを正直に伝えたところ、正面玄関の修復を自由にさせていただくことになりました。関谷幸一郎さんは長年小学校の教員をやられ、周囲には教え子たちがたくさんいました。その人柄に慕われている雰囲気を感じました。そこで地元の大工さんと一緒に、正面玄関周りのトタン板を剥ぐところからこの全てのプロジェクトは始まりました。

「土壁による修景プロジェクト」の修景という意味について少しお話しします。

日本の住宅の本来の造り方は大工さん、左官屋さん、瓦屋さんというふうに分かれて協働で作業を行ってきました。一般的に在来工法という建て方です。その中の壁作りは、かつて土壁が主流で、田んぼのべと（土）を捏ねて荒壁塗り、中塗り、仕上げ（主に漆喰）という三工程に分かれて、それぞれの壁を乾燥させながら塗り重ねていく工法です。そのため工期が長くかかり、また職人さんの高齢化という現状もあり、現在はほとんど見かけなくなりました。しかし、飛鳥時代から続いてきたこの工法は日本の風土に合ったきわめて合理的な壁作りでもあったのです。そして、この松代地域のような里山地域に景観として日本の伝統的な風景として残すこと、また、都市化で亡くしたものをここで見るができるということが、将来のこの地域の子どもたちに必要なことであるように感じました。修復工事でもいいのですが、ただ単に新しくきれいに直すということではなく、ここでは修景として、風景を整えていくという意味で使っています。また、その過程で地域の人たちとの協働制作を年中行事のように行い、継続することがこのプロジェクトでは重要なことであり、結果として地域の人たちから愛着を持ってもらうという意味でも使っています。

スクリーン画像の制作年代の順番が違いますが、この写真は2006年に行われた藤屋さん（屋号の呼び名であり、昔は金物屋として商売を行っていた店舗兼住宅）の修景作業風景です。参加者は地元の大工さん、魚沼テクノスクール左官科の生徒と先生、地域の有志の人たち、そして、この年は長岡造形大学環境デザイン学科の学生有志などが手伝ってくれました。2006年の6月から大工さんと打ち合わせをしながら、壁塗りを魚沼テクノスクールの生徒たちと行い、特にこの写真のように、2階部分の軒下が丸くなっているところなどは木摺り下地を作ってもらい、下から擦るように土を付けていきました。また、外壁木部を長持ちさせるためオイルステイン塗りを地域の人たちと長岡造形大学の学生たちとで行いました。藤屋さんにお聞きすると松代の大火直後に建てられ、大正ロマンの残る築80年経つ建物で、初めて外壁のメンテナンスを行ったとのことで大変喜んでいただいた物件の一つです。

そして、これが第3回の大地の芸術祭参加作品として成立するまでの過程です。（制作過程の記録を流す）特に施主さんからの希望で松代の冬は雪に閉ざされる期間が長く室内が暗くなるため、明り取りの窓を入れてほしいとのことでした。そこで2000年度、2002年度の修景プロジェクトで実施したように正面側の小壁をくり抜き、楕円形の明り取り用の窓をつける工事としました。今回で3件目の実施例となり、地域の人たちと話し合いを行いながらの協働制作という必然的な結果がデザインとして残され、その共通した意匠の建物が町並みを形成することで松代商店街地域を特徴づける新たな景観となって欲しいと思っています。

次に制作年代は逆になりますが、関谷幸一郎宅での作業風景の写真です。木舞壁の特

徴として竹と葦を編んで骨組みを作ります。(新潟地域は葦を基本として使い、近畿地方は竹を基本として使うそうである。この材料の使い方にも地域性が出ている。)土壁を塗る前の様子を見ていただくとわかると思いますが、幾何学的な木漏れ日が差し込みその情景が大変美しいことに気がつきます。土壁を塗るのがもったいないというか、しばらくこのまま残しておきたいという衝動に駆られます。現代の工法である工業製品で素早く板を打ち付けて壁ができるというのではなく、美術作品を作るように最初から最後まで人の手で自然素材を使い、それぞれに合った技術で積み重ねて出来上がることを再確認しましたし、その途中の過程を多くの鑑賞者に見てもらうこともサイトスペシフィック型のアートの重要なところだと思っています。結局、その衝動を抑えられず、木舞壁の骨組みの一部を見せることにして、中塗りの段階で一部の壁土を削り、窓として骨組みが見える土壁を完成させました。この時作った明り取りの窓や骨組みを見せる土壁は、その後の修景プロジェクトの規範モデルとなっていったように思います。亡くなった施主の関谷幸一郎さんは、この壁を夕方の散歩の帰りにいつもニコニコと満足そうに眺めていたそうです。この話を娘さんからお聞きしました。また、その時参加された皆さんとの記念写真ですが、この中には関谷幸一郎さんが教員時代の教え子である関谷松雄さんもおられます。関谷松雄さんはこの時の土壁塗りが一番楽しかったと言ってくれました。お世話になった方への恩返しという意味合いもあったのかと思われました。この機会にそのような相互扶助的な地域の付き合いが見られ、本来であればこのような助け合いがその後のプロジェクトでも継続できるとよかったです。(関谷松雄さんは、その後も2009年のプロジェクトまで毎年参加された。)この頃から十日町市との合併事業がはじまり区長さんが変わるなどの変遷があり、旧松代町商店街本来の地域性(人と人とのつながり)が少しずつ薄れていくように感じました。また、在来工法で建てられた家も年々少なくなっている現状もあり、古さと新しさのバランスを取りながらの融合の難しさも感じてきていました。

2001年は関谷光夫さんの自宅の土壁による修景工事を行い、2002年には今回のパネラーとして参加されている富澤恵子さんの別宅(通称おらこ)の修景工事を行いました。ここでも小壁に楕円形の明り取りの窓を設置し、壁構造も見えるようにしました。このお宅が、その後旧松代商店街の休憩スペースとして現在も機能することになります。大地の芸術祭ボランティアのこへび隊の宿泊施設として開放され、商店街のイベントのたびにお茶飲みの休憩所として、ちょうど商店街の要というか中間地点という立地もあり、多くの鑑賞者の立ち寄る場所となっています。

その後一般住宅である本山豊樹邸の外壁修景工事を行いました。会期が終わっても本山さんご自身でその後も側面の外壁を同じ色彩で修復されるなど、ありがたいことにきちんと中越沖地震及び長野県北部地震後のメンテナンス等を行っていただきました。

2004年以降は、松代商工会議所の秋山さんが商店街の人たちとのパイプ役となってくれました。2004年に「旭堂旅館」、2005年に「松栄館」、2006年に先ほど紹介した「藤屋」、2008年に「松代印刷」、2009年に「はちぜん豆腐屋」、と継続してきました。そして今年2012年度は、「日の出そば」(瀬沼さん宅)の修景工事を行い、現在に至っています。

このようにして2012年第5回大地の芸術祭まで継続してきた「松代町商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」はこの期間中で計10棟の民家及び店舗等を修景したことになります。

ここでこのプロジェクトの概要を自分なりに整理してまとめてみようと思います。大地の芸術祭では、空き家を使ったアート作品が多い中で、このプロジェクトは現代の生活空間に働きかける協働作品であることがまず特徴としてあげられます。最初に触れたことと重なりますが、アートの役割は生活する人々やそれを取り巻く環境に働きかけることで初めて成立するものではないかという考えから出発しました。そして、最終的にこの地域の共有財産となることを目指すという、もしかしたら不可能かもしれませんが、大きな目的をそのように立てました。そのため2000年の第1回目の作品制作時において、これは10年計画でやらせていただきたいということを総合ディレクターである北川フラムさんに話しました。最初は半信半疑だったと思いますが、松代町役場の人たちやアートフロントギャラリーのスタッフ、そして、その後松代商工会議所の秋山さん、またここに同席している富澤先生など地域の多くの人々との不思議なつながりや協力により、ほぼ毎年1棟の割合でこの商店街の夏の年中行事のような形で「松代町商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」は続いてきました。

また、空き家を使ったアートではなく、現在住んでいる住宅空間に働きかけるアート作品であることが特徴です。その背景として考えたことは、地域の住民ともなじみが深く愛着があるものをみんなの協力のもとで美しく整えていくという内容を大切にしていたからです。そこには現代の効率主義のもとに生まれたスクラップ&ビルトという循環に反発することで、人とモノとの関係性にもう一度配慮し、それこそ、少しでもゴミにしない環境循環型の社会を考えなおしたいという思いがありました。また、地域の住民の相互扶助というかつての村落共同体が当たり前を持っていた助け合いの気持ちを、目に見える形で現代の都市化した社会で無くしてきた豊かさとして再確認したいという思いも強くありました。

この土壁プロジェクトの意図を3つあげてみたいと思います。プロジェクトの意図の一つ目は、その行為を続けることで街並み景観としての文化の蓄積としてここにしかない風景に結び付けることです。また、地域の材料と技術で在来工法の建物を修復することで、結果として時間に耐えてきた姿が最終的にはその場所が持つ力や魅力になるのではないかという思いもありました。

二つ目は、職人と地域の人たちによる持続的な協働作業を通して手作り感のある豊かな街並みを作ることです。そうすることによって私と隣近所という意識がつながり、コミュニティのあり方や帰属意識、そこで将来のことや希望を語り合う場が生まれることを促すこと、つまり、地域の誇りや愛着の目覚めの一つになればいいのではないかと思います。

また、三つ目は、日常生活が垣間見られるような肩の凝らない街並みをつくり、周辺の山や川や土地の由来を大事にすることで、その場所に根差した必然性に寄り添い、敬意を払い、大量生産消費型のモノ作りではない人とモノの関係の中にある当たり前の秩序から生まれる美しさを作ることです。言い換えれば、日本の民芸の思想にも通じる平穩無事の美を目指すことが、この街並み修景プロジェクトに当てはめられるのではないかと感じています。

最後に2012年度は土壁による修景だけではなく、蕎麦の種を松代保育園の子どもたちから播いてもらい、商店街の人たちから育ててもらおう企画を修景プロジェクトの一環として行いました。今回の修景工事がそば屋さんということもあったのですが、実は、私のゼミの学生に「松代」というと何を連想するかと聞いたところ、「蕎麦」と返答が返ってきたことも大きなきっかけです。この季節は、新潟市から川西を通してこちらに来る途中に、田んぼの脇で白い花畑がところどころに見られます。今回のまち歩きでも目にしましたが、商店街の各店舗や家庭の玄関先に置かれたプランターにはちょうど蕎麦の小さな白い花とこげ茶色の蕎麦の実が両方見られるいい時期だったと思います。

玄関先で目にする草花はそれを見る人や育てる人をつないでくれると感じています。子どもたちの蒔いた種を地域の人たちが見守り、育て、収穫できるまでの過程を商店街の方々と共有することで、それも大きな「修景」となるのではないかと考えています。今後、建物だけの修景ではなく人と人との関係性をもう一度この機会に見直すきっかけに育ってほしいと願っています。以上で私の話を終ります。

## 小泉

村木先生どうもありがとうございました。土壁による修景プロジェクトの概要がわかりました。2000年の第1回大地の芸術祭から第5回大地の芸術祭までずっと継続して続いているプロジェクトは、この「松代商店街周辺における土壁による修景プロジェクト」だけではないかと思います。これだけ長く続いているプロジェクトの最初の出発点が、戦後の日本社会が形をひとまず整えるために生み出したトタンを剥ぐという行為から出発したということは何か象徴的でもあり、印象的な言葉でした。では次に村木先生の話の中に何回かお名前が出てきた「おらこ」の持ち主であり、このプロジェクトと一緒に応援してきた富澤恵子先生の方からお話をお願いします。



## 富澤

現在、津南町教育委員会の嘱託指導主事をしていまして富澤と申します。それまでずっと十日町、上越、長岡地域等の小学校の教員、教頭、校長を経験し、退職後、現在に至っています。

今は、嘱託の仕事をしていながら、地域の活性化に向けた取り組みも行っています。そのきっかけになったのは、大地の芸術祭で様々な人たちと出会ったことが大きな要因であったと思います。それこそ村木さんとの付き合いは10年前の2002年、大地の芸術祭ボランティアの居場所・交流の場として活用していた空き家を土壁プロジェクト3棟目の修復家屋として提供したことから始まります。土壁による修景プロジェクトで魚沼テクノスクールの生徒たちと地域のボランティアの人たちとの協働で土壁を塗ってもらい、小壁の明り取りの窓のデザインや入口の扉のデザインもしてもらいました。また、この家は松代駅からの動線の正面にあり、商店街の変化の視点となっています。私も一緒に体験したのですが、土壁修復作業に関わることで愛着が生まれます。そして、美しい空間デザインが、当たり前前の光を斬新に感じさせてくれた経験を通して、美しい街並みづくりの必要性を感じています。さっきの写真にもあったのですが、出来上がって室内から外を見た時の丸窓や小壁の窓から差し込む光の美しさが印象的でした。子壁に空いた楕円形の窓と扉に空けた丸いガラス部の大きさを決める時も何センチがいいのか試行錯誤しながら決めました。

次の写真は2003年の大地の芸術祭において来訪者がこの家に立ち寄り、村木さんが説明している写真です。大地の芸術祭の期間中は大勢の人たちでにぎわいました。

2002年に土壁改修工事を行い、その後、現在まで学生やこへび隊の居場所や宿泊施設として開放しています。また、2012年には無料休憩所茶もっこ処「おらこ」として地元と都会の若者の交流の場となり、ここを拠点に、街並みとしての土壁や丸窓の魅力を都会から来た人たちに感じてもらい、学生や留学生の視点を通して町の良さを再認識することができました。古いものを大切にしながら、もてなしの空間を再生することで人が足を止めます。だからこそ、住む人の心が見える街並みを作り、日本の暮らしや情緒が感じられる空間デザインができればいいのではないかと考えています。そしてカール・ベックスさんが松代にいますので、国際交流など、世界に目を向けたスポットづくりも可能なのではないかと思います。穏やかな平和を発信していく拠点、里山の心を伝えられる街並みなど、かつては「田舎」というマイナス要因に思われていたことが、逆に今は世界に発信していける素材、場所となりつつあるのではないのでしょうか。

昔、松代の冬は「陸の孤島」と言われて有名でした。冬はどこにも出られないようなところでしたから、店はここ（松代商店街）にしかなかったんです。尚且つ、ここになんもないもの、例えば魚や織物関係などは行商人が町に来て宿に泊まり、さらに山の中の集落

へと売り歩いたんですね。商店街はそういう人の拠点とされていた歴史がありますし、それは大事にしていきたいと思いますね。しかし高度経済成長期になると、出稼ぎで人々がどんどん外へ出て行って、若者がいなくなって離村が進みました。その後、トンネルが出来て通勤が可能になったことによって農業は兼業が可能になり、さらにほくほく線開通によって都市の人が町に入って来たり、これを契機に時代の流れとしてUターン・Iターン者が増えたりして田舎暮らしが見直されたことにより、行政レベルでの中山間地補助事業が始まりました。そして、里創プラン・大地の芸術祭が入ってきたことが、松代商店街での大きな変化のポイントとなったわけです。

時代の変化によって行商はなくなり、いつでも中心部の大型店に行けるようになり、中心商店街の店舗の多くは閉店してしまっているのもひとつの大きな変化です。しかし、先ほども言いましたが、大きな流れの中での田舎体験・里山ブームなど、また別の変化も出てきていますので、またここからも変化していくのだろうという方向が見えてきたような気がします。このような背景を抜きにしてアート作品を作ったり、町並みを作ったりしても、どこか不自然なのではないかと考えます。

そして地域活性化は、住人だけではどうにも出来ないものがありますから、そこへ風穴を開けるのが芸術祭で街に来たアーティストや外国人、都会から来た人、県外の人、専門家（有識者）等の人たちなのだと思います。風穴を開けるエイリアンによって突破口が開かれると、その向こうに未来が見えてくる気がするんです。おそらく、過疎集落の再生等、村木さんやカールさんは集落にとってはそんな風穴を開けるエイリアンのような存在だといえますね。

そのことがきっかけとなって中心商店街の活性化、特に住民が自慢できるもてなしの場づくりに結びついたらいいなど、感じています。アーティストやエイリアンの方々が地域の人間と関わることによって何かを変えていく、そういう流れが地域活性化のサイクルに繋がっていくわけです。地域の特色のクローズアップや専門家との連携、住民交流の推進、住民意識の高揚、地域型アートプロジェクト、地域内外の情報発信、記録の集積・累積などの活動が生まれるサイクルを作っていくことが大切なのではないかと思っています。

しかし最終的にはコミュニティの自立ということで、地元が意識を持って自立に向かわなければ、その流れはストップしてしまいますので、そういう流れを地元が作っていくことも重要だと思います。私も10年間、様々な人とかかわっていろいろと学ばせていただきました。

「里山はいいよ」という時代の流れの中で、これからは経済利益中心だけではない流れに向かっていきたいのですが、しかし、現実には経済利益優先になっていて、限界集落や村が消えるという状況になっていますので、魅力を再認識していきたいという思いが

あります。だからこそ、古民家やいろり文化で育まれた情緒などを思い起こさせてくれるヒト科ホモサピエンスの家として木と土と草と石などの自然素材で作られているものに惹かれます。

古民家・田舎暮らしへの願望は遺伝子の疼きと書きましたが、大地の芸術祭ではいろいろな自然素材を用いてアーティストが作品を作っています。村木さんは土と草で作っている。おそらくそれが心地いいとか安らぎを感じるなど、ヒトとしての原初的な感性を満たすことに繋がっているのではないのでしょうか。古民家、いろり文化、自然素材への回帰ということについて言えば、私たちの遺伝子の中にはそういったものに安らぎを覚える遺伝子というものがきちんと組み込まれていると思うんですね。今まで忘れかけていたそういった脳みその奥の遺伝子の動きをみんなで共有しながら、アートやコミュニティ、地域や文化や未来に結び付けていくやり方ができたらいいし、そういったところから意識の変化が生まれるんですね。自然の一部としての生き方を地域や都市の青少年に教え育てる活動を通して、未来に日本の暮らしを伝えていけたらいいのではないかと感じています。

実際、私自身も10年間の関わりの中で意識の変化があったわけですが、色々な方々とお話ししたりお会いすることによって今まで意識していなかったことが分かったり、エイリアンの方々に風穴を開けていただいたことによって、色々なことが見えてくると実感しています。「里山は生き方のフィールドミュージアム」であり、それを見せることが生き残る道なのではないか、そういう風にも感じています。商店街でも色々お祭りがあるんですが、稚児行列や時代行列、こういうものはやり方によって色々な工夫が出来ていくと思います。

それから最後に、東日本大震災対策委員長の北澤宏一さんにお目にかかる機会がありまして、本も読ませていただきました。第4の価値～低炭素社会の実現～というタイトルなのですが、これからの私たちの生き方やアートのあり方、文化の作り方など何にでも結びつく考え方であるこの本を読んで感じています。今まで高度経済成長の中で作り上げてきたものはもろく崩れてしまっているので、もうそういう社会では生き残れないのだと。やはり私たちは第1、2、3次産業に頼ってきた社会のあり方を見直して、第4次産業、第4の価値をこれから見直し、作り上げて、そしてそれをさらに経済社会に生かしていく、それで経済をまわしていく仕組みを作っていくことが必要とされています。特に欧米は経済が崩壊しているので、日本こそそういった部分に心を込めていくべきだと思います。そのための素地はこの地にたくさんあると思いますので、あとはやる気の問題ですね。

芸術祭も、最初のきっかけは有名な作家が来て、お金をどーんとかけて、何かを作って、「あれはなんだ！」みたいな感覚もありましたが、10年経ってようやく住民が協働して、

関係を大切にしながら一緒に作り上げていく「大地の芸術祭」に生まれ変わりつつあり、未来に繋がっていくのであろう、と感じています。何はともあれ、田舎の収束していくような社会や落ち込んでいく気持ちを、「いいところだよ」「楽しいからおいで」というように、不安から自信への意識転換を図っていく、負から富へ変えていく、そういうきっかけをアートとか様々なことが担ってくれればいいと期待しています。社会の最小構成単位であるムラの在り方を忘れてしまったら、生物界に誇れるイキモノにはなれない。そこに気づき真剣に考えることができる環境がまだこの地には残されている。そのことをアピールしていくことが、この地の役割かもしれないと思っています。私自身が村木さんに関わらせて頂いて空き家を改装した結果、変化が生まれていることを経験しているので、やっぱりそういうきっかけが必要なんだと実感している一人です。以上で私の報告を終わります。

#### 小泉

富澤先生、ありがとうございます。富澤先生のお話の中で特に面白かったな、と思ったのは「エイリアンの方々が風穴を開ける」ということがきっかけになって、コミュニティの自立というところに行く必要があるというお話でした。富澤先生自身も先程の街歩きの際に立ち寄らせて頂いた「もてなしの空間」を作られたり、ご自宅を開放されてこへび隊を泊めていらっしゃるというコミュニティの自立に繋がるようなご活動をなさっていますよね。それについて1つだけお聞きしたいんですが、それはどういう思いから活動をしようと思われたのでしょうか？

#### 富澤

はい。それは当初、大地の芸術祭に来た泊まる場所もないような若いお姉ちゃんを拾ったことが始まりだったんですけれども。(笑)義務や責任や商売やそういったことは一切なしに、自分が積極的に関わったら楽しかったということです。結局、そういう思いがないと。何でもそうだと思うんですね。自分が楽しむ、楽しめる、協働してみんなで働いてアート作品を作り上げるということと同じだと思うんです。関わりをもってみんなと一緒に何かを作り上げる、そういう気持ちが根底にあるかなあとと思います。心地よいことをやる、美しいものを作り上げる、何かの役に立つなど、自分の気持ちが満たされることをすることが社会の中で互いに関わり合って暮らすために一番大事なのではないかと思います。

#### 小泉

ありがとうございます。人と関わるのが楽しいからということなんですね。

それでは、次に続けさせていただきますが、長岡造形大学の後藤先生に建築の視点から、街をつくっていくというのはどういうことなのか、そもそもアートというのはどういったものなのか、どういったものであるべきなのかというところを根本的に問い直すよう

なご報告を頂けると思っています。ちなみにですけれども、後藤先生は今のつながりということかというと私の高校の先輩でして…大先輩なんですけれども。ちなみに村木先生はある知人のアーティストを介して知り合いました、さらに富澤先生は偶然ですけど中越地震の研究に来られていた信州大学の先生でつながっていて、ということでこのシンポジウム自体が色々なつながりの中で行われているということになります。それでは、後藤先生よろしくお願ひします。

## 後藤

只今、ご紹介に与りました後藤と申します。長岡造形大学で教えだしてもう18年になります、色々と思うこともあります。今日はそれを少しお話させていただきます。まず自己紹介をしますが、1952年生まれで今年が還暦です。レオナルド=ダ=ヴィンチが生まれたのが、1452年なので500年後に生まれたということになります。長野県に生まれて小泉さんの先輩にあたります長野高校の出身です。東京大学の都市工学学科というところに入りました。1964年の東京オリンピックの代々木オリンピックプールを作って世界に名を馳せた丹下先生の次を引き継いだ大谷幸夫という方の研究室で31歳まで勉強していました。その間、パリに5年くらい住んで街や建築を研究したりして、帰国後10年程建築事務所に勤めた後、こちらに引っ越してきたのが18年前ということになります。

当時、1960年代～70年代の丹下研究室や大谷研究室というのは、国家を背負って立つ建築はいかなるものぞ、ということを一生涯考えていた時代です。高度経済成長の時代というとはやはり経済力のある日本国というものを世界にアピールしなければならぬ。その為のカタチは何かということを一生涯やっていた。その反面教師として僕の恩師の大谷幸夫という人は、「いやまてよ。やっぱりそうじゃない。個の時代だ。」ということを考え始めた時代です。

そういう意味もあって、実は都市計画・都市設計を私の専門と言っています。ですが、都市設計を考えると個の建築が一生涯つくりなかつた建築だったら全体的にはまずいということから、私は建築設計を都市計画の最初の入口としてやっているというのが現実です。造形大でも建築設計を教えながら、都市を考えるということをやろうとしているわけです。

それで、今日は村木先生と一緒にまち歩きをしてきました。実際にまち歩きをしてみても、松代はなかなかいい街だな、ということが分かったわけです。どういった風がいいかというと、まち歩きの途中で鈴木松蔵さんに伺ったお話によると「松代の街は大正9年に焼けてしまいました。今、ここに残っている古い建物、中心の22軒は大正9年以降の建物なんです。」ということでした。つまり大正モダンの時代の建物なんですね。それでいて、よくみるとせが造りの建物になっているんです。せが造りというのは軒を梁で出して、軒を深くする造り方です。もう一つは道側に廊下のようなものを出して

いる、旭堂旅館さんや藤屋さん（金物屋）のような割と特徴的な造りをしている建物がある。藤屋さんのファサードを見ると、柱にヨーロッパ風の彫刻が少し入っていたりして、頑張っている。当時としては大変モダンだったんだと思いますが、今から見ると松代の建築の形式の中で物を考えているんだな、ということがよく分かる訳です。そういうようなことは100年が経った今でも、好感が持てることなんですね。当時の建築家は頑張ってモダンなものを作ったんだな、と。その気持ちわかるな、ということです。

それでは、ここでレジュメを見ていただきたいと思います。これを見ていただきながら、私が設計をした小学校のスライドをお見せし、まとめていきたいと思います。

まず最初に題からですが、「田園に小学校を作った」。これは千載一遇のチャンスで、小学校という子供たちの教育環境を作ることは、普通の商業施設を作るということや調査ということとは少し違ったもので、私は大変よい機会を与えて貰ったと思いました。一生懸命考えました。

では、何を考えて作ったのかというと「まちに新しい建築を挿入しなければならない」どういう風に挿入したらいいのか。今、村木先生がやられていることは街を修景しましょうということだけれど、まちを作る時にはまず建物を作らなければならない。では、作る時になにを作ればいいのか、ということを考えることが都市設計の第一歩なわけです。それがはっきりしていないと、今の日本のどこにでもあるような「ミニ東京」といわれるような街になってしまう。だから、最初の一步が肝心だということです。

そこで何を考えたかということ三項目あげました。最初に「住民が蓄積してきた歴史を読まなければいけない」ということです。「天然のジオトープ、小島谷川」これをどうしたらいいか。「地域のシンボル弥彦山」新潟の人はみんな弥彦を好きなんですよ。映画の寅さんでも今年の正月は弥彦に行って頑張ってくるぞ、と言っているシーンがあります。「牧歌的な越後線の列車」越後線は近代化の象徴で、開業して100年経っていて歴史があるものです。もっとすごいのは「良寛和尚」、良寛さんは和島村で最後の5年間を過ごしたということです。良寛さんが子供たちとかくれんぼをして、子供たちが帰ってしまっても良寛さんがかくれていたというのが和島村です。

それからもうひとつは「空間の継承」をしましょうということです。空間の継承とはどういうことかということ、近くには八幡林遺跡を代表とする色々な遺跡がある。それから盆地のように田園が広がっていてまわりに山がある。また旧農道は耕地整理をする前は弥彦に向かって出来ていて、そういう地形をよく反映している。旧農道を校内に復元したらどうか、と思ひ浮かぶような集落のスケールがある。そのスケールを壊さないようにするにはどうしたらいいのか。あるいは木造の平屋建ての空間、これは当時の村長さんの要望だったんですが、平屋建の空間といっても昔の小学校のような平屋建ではない空間を作ろう、とかですね。例えば空間体験を子どもたちに提供したい。子どもたち

がいろんな空間へ行って「ああ、この空間はいいな」とか「この小さい空間はいいな」とか、気分が暗くなった時に「こういうところに居たいな」と思えるような空間を作ってあげよう。あるいは地域の活動の場として、小学校というのは地域の人が通う場所ですから、すべての人の原風景となり得るといふ地域の活動の場として重要であろう、ということですね。

それからその地域の核（コア）になるということは、他方、災害が起きた時には防災の拠点になる、ということが言えます。そういうことで、散策とか憩いの場でありながら、災害時の拠点としての機能もさせなければならないとも考えました。

それから「新たな環境創造」をしなければならない、ということ考えた時に、自分ひとりよがりの環境を作るのではちょっとまずい。地域参加型の設計プロセスがあり得るな、と考えて、保護者と教職員と話し合いの場を持ったり、地域の自治会長さんに集まってもらい、どういった地域のコアとしての小学校がいいのか検討会をしました。また、地域の大工さんや左官屋さんとも色々検討をしながら、また相談しながら、意識の共有化を図りました。実はそこに村木先生も居たんです。

それで出来たのがこれからお見せするスライドです。その時に何を考えなければならないのか、ということをつくつかまとめました。まず「多様性のある世界の一員となる」ということです。我々は世界へ羽ばたかなければならない。世界の人々に我々を認めさせなければならない。ということは、地域の個性を顕在化させることによって、その多様性を確保する。

均一な世界ではないということは、個々がアイデンティティを持つことに繋がると思います。つまり自分たちの持ち味を十分に発揮させて、そこに存在するということが重要なのだろうと。さらに、豊かな地域のイメージをその地域の人たちと共有化をする、共有化を図るということを目指さなきゃいけない。地域の生活の中の公共という概念があるんですけども、実はその「公共」というのは共有化された空間、あるいは共有化されたひとつの祭のようなものでもいいんです。そういうものがあってはじめて公共性というものが成り立つ。だから、そういう空間を大切にしようということになります。ですから、そういう意味で地域参加型の設計プロセスを持っていくということは、人々にどういうことを考えて、どういうことを説明しようとしているかを納得してもらうことから始まる。それで、はじめてその小学校が公共化する、と考えました。それは、環境とか建築、あるいはコンセプトのサステナビリティ（持続可能性）を確保しよう、ということなんです。

最後の「ローカルであり続ける」こと。ローカルであるということは、個性があるということなんです。その個性を他の人から認めさせる、ということに主眼をおく。これは、私が25歳から30歳の間、フランスのパリにおりまして、一番感じたことなんです。日

本人として対等にヨーロッパ人と付き合うには、日本人でなくてはならない、ということなんですが、それはつまり東京と地方ということでも同じことなんですね。そんなことを考えて設計しました。

今、この会場に僕のゼミの院生が一人来ています。大学院生の授業を通じてデザインの原点に帰ろうということ。現在、我々がいる近代や現代のデザインや建築という領域がありますが、その大本というのは産業革命以降のイギリスのアーツ&クラフト運動ではなかろうか、という風に考えておまして、そこでウィリアム・モリスという人がいるんですね。原点みたいな人なんですが、そのウィリアム・モリスの言葉に非常に感銘深いものがあったので最後に4行あげておきました。

「芸術とは、人間の労働における喜びの表現である…人間は、活動の気分の際は芸術を創り出し、怠惰の気分の際は芸術を鑑賞し、活動の気分へと上向きにする。芸術の実践は自発的なものである。」<sup>1)</sup> 他人から押し付けられるものではない。自分で自発的にやる、と。

先程、藤屋さんの外に面した柱のところに大正モダンではないけれどもちょっとヨーロッパ風の刻みが入っている話をしました。その刻みを入れたのは、おそらく大工さんが自発的に「ちょっと入れてみよう、これはかっこいいかもしれないから入れてみよう」ということだったと思うんです。そういう気分、そういうものが芸術だろう、と。そういうものを大切にしようということで、村木先生のお話につなげたいな、と考えております。

そういうわけで、私は私なりに和島小学校を大正モダンのちょっとした刻みをいれるように一生懸命作ってみました。それをみなさんにご覧頂ながら、皆さんが考えるきっかけにして貰えたらと思います。

#### ～スライド説明～

- これは和島小学校の風景です。色々経緯がありまして、5年間くらいかけてやっと出来ました。作ってから4年くらい経ちます。全体的には環境の中に平屋建を作りましょうということで、このような形で中庭を配してグラウンドとビオトープ、そして大きな広場がある。子どもたちが写っていないのが残念ですけども、こんな風景を作ってみました。

最初は模型の段階でいろんなスタディをしまして、下の方に出てくるのが先程説明した色々な分科会を作って「ああでもない、こうでもない」と。我々建築家としては専門家としてA案・B案・C案と作って、たたいてたたいて、色んな人の意見を入れながらひとつの成案に作り上げる、というスタンスでやっています。こんな田園風景の中の、これは高学年棟ですけども、三つの棟があります。他に低学年棟が三つありまし



て、例えば自分の子供が小学校6年生だったら、6年生の子供は右側の校舎にいるんだなあということが分かるように、ということでも分節させています。

- これは弥彦です。実は敷地は6haくらいある大きな敷地なんですけれども、その構内道路の右側に小学校、左側はまだ出来ていませんが老健施設の予定です。この真ん中を通る道路をどういう風にするか、といった時に実は下の方に昔の地図があるんですが、その地図の左側を見ると弥彦に向かって走る道路があります。それを尊重して、真ん中にシンボリックな校内道路を通しましょう、と。それで子供たちが毎朝来るときに弥彦が見えるようにしよう、弥彦とこの地域をシンボライズさせようということでもそういう計画にしています。
- これは先程説明した高学年棟、向こうに低学年棟があって体育館がある、という図です。全体は面白い風景なんですけれども、向こうの左側の方が生活スペース、右側の方が共用スペースで、老健施設と相まってひとつの「共育の村」なるコミュニティを作ろうということにしています。
- これは集落のスケールと学校のスケールを同じにしようということでもやっています。
- これは入口のところで良寛さんの歌をレリーフにしています。このレリーフは「いざ子供 山べに行かむ 桜見に 明日とも言はば 散りもこそせめ」という歌なんです。チャレンジナウという解釈なんですけれども、ここに彫って、あたかも後ろから良寛さんが現れているような感じの空間を提供しようということでもやりました。
- これは高学年棟ですね。学校設計からいうと、多目的スペースというのが必要になってくるんですけれども、低学年棟の多目的スペースは庭と同じようなスペースとして後ろ側にとりますが、高学年の場合はクラスとクラスの真ん中に多目的スペースをとって、習熟度別のクラスが出来るようにしました。
- これは理科室、図工室、ランチルームといったものです。
- これは講堂ですけれども、講堂は非常にいいスペースで300人くらいがパッと入って、卒業式・入学式・地域のダンススクール等、色々やれるようになっています。
- これは校長室から見た中庭の風景で、校長室からは低学年棟の三つがよく見渡せて、子供たちがこの中庭で遊ぶことができます。村木先生と協力して、あの石垣は村木先生に積んでいただきました。
- これも実は土壁を塗っています。土壁を全部やりたかったんですが、丁度実施設計に入る前に中越大地震がおきまして、長岡地方、中越地方の土壁が全部落ちてしまいました、これじゃあ駄目だ、というクレームがついてしまったので、部分的です。それからこれは越後杉を使っています。あとは色々な散策風景ですね。色々なシークエンスを作りながら、子供たちに空間体験をさせるということです。
- これは高学年棟です。高学年棟は中庭に向いていなくて、越後線に向いています。広

く世界を見てもらおうということで作られています。

- 体育館です。体育館はすべて木造で作ったんですけども、市役所の担当者がバレーが好きでバレーは屋根高が12m以上なければ駄目だと言われて、その為に屋根だけ木造になりました。
- これは造形大の先生が作ったピクトです。ピクトもオリジナルですが、子供たちが将来「何になるぞ」ということをイメージ出来るように作っているんですね。コンピュータ技師や音楽家というような…色々ありますね。
- それでこれは村木先生の作品で、「和島小学校の大きな表札をなんとかして欲しい」ということでお願いしたものです。
- それから下に傘立てがありますが、実はあれは私が自分で手作りしました。そして真ん中にレリーフがありますが、あれは私の次男が芸大に行っていて、なんかやっつと頼んだら「クローバー」という題でレリーフ案を作ってくれたものです。四つ葉のクローバーが三つ程あります。子供たちがご飯を食べた後に楽しみながら探すように、ということです。コンクリート表面に色鉛筆で色を塗っています。
- この校章は私がデザインしました。雪割草が村の花だったのでそれをあしらいました。真ん中にはもう無くなってしまった和島村の村章を入れ込んで、ここは統合小学校なので、島田小学校と桐島小学校を合わせて新しい校章にしましょうということで作ったような次第です。
- 当時、土壁は村木先生の協力で色々なことを試みました。地域の左官屋さんで「こんなことをやったらどうか」ということで一生懸命やったんですが、なかなか上手くいかなかったりもしました。ざっとこんな形で和島小学校を作りました。

それで、これは小学校そのものが本題ではなくて、随所随所に「一生懸命やった」と。一生懸命やることによって、その人の気迫が建物に乗り移る、と。それを先程のウィリアム・モリスの言葉じゃないですけども、怠惰な気持ちになって、少し元気を貰いたいな、と思う人に少し刺激を与えることが出来たらいいな、と。それを見ながら次の物を作るときも、その気迫に負けないようなもの作ってくれる、作るぞ、というような人を育てたいな、という風に実は思っています。

そういったことの連続が19世紀末のウィリアム・モリスが言っている「手仕事のアート、芸術」に実は繋がっているんじゃないか、と思います。ということで、我々人類は100年経ってもあまり変わらないというよりも、実は後退してるのかもしれないな、という印象を受けています。そんなことで、取り敢えず問題提起なんですけれども、「一生懸命作ろうよ」「物を作る人は一生懸命作ろうよ」ということを皆さんにお伝えできたらいいかな、という風に思いました。以上です。

## 小泉

後藤先生、ありがとうございます。大変素晴らしい建築ですね。私はアートというよりも、元々は、どちらかというと音楽が専門なんですけれども、後藤先生の場合は建築という分野からアートに関わっていらっしゃるわけですね。建築というのは社会と関わるのが当たり前、というか社会と関わらずして作れないということで、この大地の芸術祭にも示唆するところが大いにあるのかな、と思いました。中でも印象的だったのが、地域の個性に基づいた多様性が必要だという点です。その個性を作る為に、個性の背後にしっかり支えとしてあるべきものとしての歴史・空間・人というものを挙げられていて、そういう三つの柱のところから支えられた個性によって作り上げられる多様性の中で生き抜いていこうよ、というようなメッセージを受け取りました。先生のこの小学校のご活動はいつ頃でしたっけ？

## 後藤

4年…いや3年前かな。

## 小泉

今も実際に使われているんですか？

## 後藤

そうです。

## 小泉

いやあ、私もこれは是非訪れたいなと思いました。

## 後藤

是非行ってください。それで一言付け加えますと、今、小泉さんが言ったように「個人的でなくてはいけない」というのと「差異化を図る」というのを間違えている場合が実はあるんですね。人と違うことをすれば個人的かということ実は違って、そうではなくて人と同じことをやりながら個人的であれ、という。建築の場合は特にそうです。同じ形式、松代のせがい造りで真壁で、なおかつ、裳階的な廊下があって、それを作るんだけど個人的でありたい、という時に一番難しい問題に直面する。それが出来るか出来ないか、ということなんです。個人的であれ、といって今あるものを廃棄して全く違ったヨーロッパ風の、フランス風のものを持ってきて「これは個人的だぞ」というのは間違いです。それをやってしまったのが、戦後の日本の一面じゃないかな、という風に私は思っています。

## 小泉

先生の作品を見るとフランスに行ったらしゃったという一方で、借り物のヨーロッパ風ということではない事に気づきます。例えば印象的だったのが他の住宅と高さが一緒にしてある。そういうところでも地域の歴史のことを深く考えていらっしゃるな、と

感動させられました。

最後に、時間も押してしまっていますが、私のほうからも報告をさせていただきます。私は、関係性のアートというジャンルからのお話をさせていただきます。

先ほど村木さんたちとまち歩きをしてきたのですが、その時に撮った写真です。(「土壁プロジェクト風景(おらこの蕎麦の花と小壁の窓)」を参照)今回のプロジェクトで修復した一軒の家の小壁にあいて

いる窓ですが、村木さんは、この窓の大きさを何センチにするのかということを経験の人々といろいろ相談しながら決めていったそうです。このようなこと、建物を直すことがなぜアートになるんだと率直に思われた方がいらしゃるのではないのでしょうか。ただ修理をしているだけではないかと思われるかもしれません。私の話は、なぜこのような行為、地域の人々との協働作業そのものがアートになりうるのかというところの話の一つの角度から話してみたいと思います。言い換えると、近年隆盛する、社会の出来事に関心を抱き、人々の「協働」によって行われるアート活動と、その背景を探っていきたいと思います。そしてそこから松代におけるアートの可能性や、なぜそのようなアートが必要となるのかを考察していきます。着地点としては先ほどお見せしたこの写真ですね。これがなぜアートで、あるいはなぜ、松代で必要なのか。ということを考えていきます。



写真3 土壁プロジェクト風景  
(おらこの蕎麦の花と小壁の窓)

今回大地の芸術祭に参加しているリクリット・ティラヴァーニャというタイの作家がいます。今回は、カレーを作ることをやっています。今朝写真をとってきたんですが、なんでカレーを作って食べることがアートなのか、行った方はそんなことを思ったかもしれないですね。ちなみに彼は、カミン・ライチャイプラサートというアーティストや、地域の人と一緒に、田植えをしたり、アートの作品を展開したり、大地の芸術祭と似ているところがある「ランドプロジェクト」という活動もタイで行っています。

ティラヴァーニャの場合は「もの」を作らない。「もの」を必ずしも前提とせず、「人々との関係性」や「つながり」に焦点を当てる、ものによらないアートを作る。なぜそのようなアートを作っていくのか。ティラヴァーニャは、都市化の中で「分断化」されてしまう人々、あるいは、そこで「商品」として扱われるようになったアート活動に対して、違うのではないかと提案を行っています。人々の贈与的な関係性への着眼から

アプローチしていく。お金を介在させるのではなく、気持ちを介在させる。気持ちのつながりに焦点を当てる。

例えばカレーを食べる、お金を払う、ありがとう、で終わるとというのが普通の関係です。しかし、その時におカネを対価として払うのではなく、違う何かを介在させる。「気持ち」ですね。お金を払えばおしまいではなくて、「気持ち」のつながりを作ること。こういう人々の関係性に着眼したアートを、ニコラ・ブリオという人は「関係性のアート」と呼びました。

次に、関係性によって作られたアートとはどういうものなのか、もうひとつ別のアーティストグループの話をしていきます。これは、ヴォッヘンクラウズールというウィーンをベースに活動しているグループです。彼らのグループのインタビューの様子です（インタビュー動画再生）。リーダーの彼が何を言っているかという、「アーティストというのは社会の一部である。社会の中で自律的な存在ではあり得ない、それは幻想である」と。そして、「もし、社会の中の一部としてのアーティストであるならば、なぜアーティストは社会に対して何かをなさないのか？」そう言っているわけです。

そこで彼らは物を作らないで、人との関係性を作る。そういう活動をする集団です。例えば、ウィーンでのプロジェクトでは、医療車を走らせるというプロジェクトをしました。ウィーンは観光都市ですが、裏ではホームレスが沢山います。ホームレスの人たちは行政から支援を受けられない。市民として認められていないため医療行為を受けられない。アーティストやジャーナリスト等からなる彼ら集団がそのことに異議を申し立て、医療車を走らせるために、自分たちから政治家、政党、医療関係者らに話をして、色々な人たちをつなぎ合わせながら、ホームレスの為に医療車を走らせる。

このプロジェクトの手法の面白さは、アーティストだからこそ持つアイデア性や、アーティストだからこそ動くことができるという立場を重視しているところです。プロジェクトは、最初に市長・与党や野党に電話をかけ、ウィーンの福祉行政のひどさを伝える、というところから始まります。野党には、今この福祉行政に着眼し、良くなる政策を立てれば、市民からの支持を得られることを伝えます。そして、次に市長・与党には、このままではまずいですよ、野党はやる気ですよ、という。それに、やる気がないならこのウィーンのひどい福祉政策の事実をドイツ語圏最大の雑誌社、シュピーゲル誌にリークせざるを得ない、と揺さぶりをかける。こうなると、市長・与党も動かざるを得ない。結果、医療車を走らせるための集中会議を、与党、野党、ホームレスの人々らと開くことに成功し、実際に医療車を走らせることに至るわけです。そういったアーティストらの「トリック」や「アイデア」を使いながら、彼らは色々な人との関わりの中で、プロセスと対話を重視したアートを展開します。まずリサーチし、住民ら当事者と議論を重

ね、そして自治体に活動を起こし、さらに自己評価までする。本当にどのくらい有効なのか検証し、そして、継続へ向けた環境づくりまで行うわけです。このような関係性の対話の中からアートを作っていくわけです。このような「アーティストは社会の一部である。だからこそ、社会に対して何かをしていかななくてはならない」という主張と活動をヴォッヘンクラウズールは行っています。

例えば、行政にいる人、企業に所属している人など、立場にある人々は社会の中の自分が属している位置や立場にとらわれて、何か問題があっても何も動けないし、何も言えない。しかし、アーティストは社会の隙間に橋（ブリッジ）を架けることができる存在であると彼らはいいます。「関係性のアート」は、他にも「対話型のアート」、「社会と関わる芸術」、「コラボレーション」、「コミュニケーション型のアート」など、様々な名前で呼ばれていますが、これらのアートの目的は、地域課題や社会福祉、教育といった様々な課題に対して、従来の「作品（だけ）」のみならず、「人々の関係性」を重視しながら展開する活動である点に共通点が見られます。

では、なぜアートが、関係性のアートに向かって行ったのかということ、ここでは90年代前後以降の日本のアートに大きな影響を与えた欧米の動向から考えます。以前はアートといえば、絵を描いたり、彫刻を作ったりするものでした。しかし、もっと昔は違っていました。人間がもつ様々な技芸や概念が、広くアートと呼ばれていました。では、そのうち絵画などがなぜ特に「アート」と呼ばれるようになったかということ、レイモンド・ウィリアムズという文化研究者などが言っていますが、資本主義経済が発達したせいで、お金でアートを買うことができる社会になり、19世紀終わり頃までに、はじめて、売って持ち運びができる形態のものが「アート」の主流になったわけです。ですが、それが1960年代から徐々に変化していきます。例えば1960年代から80年代頃には、コンセプチュアルアートなどと呼ばれる「むずかしい」アートが生まれます。しかし、その後、1990年前後から、これらの「むずかしい」アートに対して反省が生まれます。後藤先生の先ほどのお話につながるとは思いますが、もっと人間の基本的な行為、例えば食べるとか寝るとか暮らす、社会の中で生きていくなどの日常の当たり前に行っている行為から、アートを見直そうという考え方につながってきます。例えば十日町で暮らしている人の生活は、東京とかニューヨークとかで暮らしている人から見たら、同じ食べる行為にしても、同じ暮らしにしても、実は全く別のことをしている。例えば、里山の風景を見た時に都会の人はおもしろく、新鮮に感じる。そして、里山の暮らしは面白いのではないかと感じます。里山は人間が作った文化ですけども、その土地の人にとってみれば当然の文化ですが、実は当然の文化が地域によって違う。違った意味でとらえることができるということに気がつきます。もっと原則的な日常生活、当然の日常

常生活を見つめ直すことが大切なのではないかという視点に気づいて、アートもあまり難しいことばかりを言わなくてもいいのではないかと。そういった文脈の中で「関係性のアート」が生まれてきます。

ただし、ひとつだけ言えることはどんなものでもアートになるわけではないということです。例えば先ほど紹介したリクリット・ティラヴァーニャという作家は、都市化による人々の分断化、希薄化、あるいは作品が商品として置き換えられるアート界、そういったものに批判意識があります。また、欧米中心主義的なアートの見方への批判や、彼の個人的な体験から、地域的な固有性を重視しています。彼はタイ人で、外交官の息子でした。小さい頃おばあちゃんが作ってくれたタイカレーが思い出に残っている。そういった自分のルーツ、自分の生きてきた歴史に根差して、タイカレーのプロジェクトをやっています。ただカレーを食べるプロジェクトでもいろいろな角度から考えることができるメッセージを含んでいます。

2000年代以後のアートは、このような欧米の動向やそこへの批判を受けながら、いろいろな地域、あるいは都市部だけではなく十日町のような地域社会に広がっています。ヴォッヘンクラウズールのように、アーティストのみならず様々な人々と一緒になって展開していくようなアートが地域社会でも進んでいきました。

一方、関係性のアートに対して批判的な見方もあります。ただ単に人とのつながりを作るといふこと、それが目的になってしまうと、アートが重視してきた反社会的なこととか、実は人と人との間にある違いが排除されてしまうのではないかと、という批判です。つまりどういうことかといふと、つながりを作りましようと考えた時に、つながりを作ることが目的になってしまい過ぎると、実は一人一人違うことを思っている、あるいは「実は私はこうなんだ」と思っていたとしても、一緒になろうよと言われているから何となく「違う」といふことが言えなくなっていく。そこに問題があると。そこで、先ほどの後藤先生の話と関わることと思いますが、ハル・フォスターという美術批評家は「単に人との関係を平面的に考えるのではなく、例えば歴史とか場所に根差したもの、そういったところに隠されたつながり、見えているものの実は裏にある隠されたものを含めた上で、表面的なつながりではないつながりを考えていかなければいけない」といふことを言っています。

まとめると、人々の協働の重要性を強調することばかりに目が行くと、平面的なコミュニケーションや、全員にとって表面的に「良いこと」ばかりに目がいってしまう。そうではなく地域固有の歴史性の重視のようにひとつひとつの地域や人々の違いにも目を配ることが重要になる、ということです。このような視点は、「関係性のアート」など、欧米のアートの動向を受けつつ、地域社会に根ざす活動を進める大地の芸術祭には欠かせないものだと思います。

最後に地域社会において「関係性のアート」を展開するために必要とされるものや、それによって期待されることは何かということをお聞きしたいと思います。まず、必要とされることから言うと、「芸術の見方の変化に対応した、地域社会における新たな芸術への理解や制度づくり」です。例えば、村木さんのやっていることはただ単に土壁を直しただけに見えますが、先ほどのご発表にあったように、実は制作する過程の中で、いろいろな人たちと関わり、過去も含めたいろいろな人たちの想いがそこに結び付いています。そして、その人たちにとって地域を考え直すきっかけになっています。ですから、作品として正面にデザインされた明り取りの窓がおもしろい、というのを見るだけでは不十分であって、「関係性のアート」で言うところの、作品完成に至るプロセスのこと、つまり、その裏に隠された歴史的な意味との関係性や、作品制作に至るプロセスが地域にゆっくりと生み出すものも含めて考えていく姿勢が、地域に必要とされるのではないのでしょうか。このトリエンナーレで12年間にわたって活動されているのは村木さんくらいではないかという話をさっきしました。それらを踏まえて、なにかしらの制度を作る時には、それら活動の過程全体を見た上で考えないといけないのではないかと思います。この作品がいくらです、という性質のものではないということです。

さらに期待されるものが何かというと、このような地域に根ざした継続的な活動が、「地域のアートシーンを作る」ことに結びつくんじゃないかということです。どういうことかということ、日本は明治期にヨーロッパを模倣して芸術という制度を輸入しましたが、その後、各地域では独自の発展や展開が見られたものの、戦後の「列島改造」的な高度成長期が逆説的に招いた東京一極集中構造の社会制度と意識変化により、地域独自のアートシーンがなくなりました。例えば、地域社会でトリエンナーレをやるといっても、内実はヨーロッパ各国の有名な作家や東京の作家を呼び、かっこいいとかすごいと言わせている構造になってしまっています。

実は、輸入元のヨーロッパとアメリカは全然違って、その小さな都市や地域なりの面白いアートシーンがまだあります。先ほど話した「関係性のアート」は、地域のいろいろな要素や歴史に裏付けられてできるものになりうるわけで、結果として一極集中型の文化構造に抗うものにつながるものであり、つまり、「新しい松代の文化」等につながりうると思います。地域の固有性を見出しながら、その固有性や隠された地域課題を見出す存在としてのアーティストがいることで、それに対して一緒に働く人が出てきて、動いてくれる人とまち、それらを支える制度ができ始め、「松代のアートシーン」ができることになるのではないかということです。もちろん、そのために、これらの過程では地域全員にとって表面的に「良いこと」ではなく、地域の歴史や「固有性」、人々の「違い」の価値にも目を配ることが重要になるのではないかと思います。かなり駆け足でしたが、これで私の報告は終わります。



#### 4. まとめ

上記の内容は、このシンポジウムの報告内容を記録したものであるが、まとめることは難しくそのまま掲載させていただいた。4人の発表内容に加え、その後30分ほどのオープントークの中でも興味深い内容の話題があった。最終的にアートとは何かという概念を参加者全員で考える機会になったことは、問題を投げかけた側として嬉しいことであった。

実は12年間芸術祭を行っているこの松代地域では、協働という形で関わった住民の人たちが、アートの概念崩しやアートを模索していくという作業を必然的に行ってきたということに気づいた。また、シンポジウムの中で行われた様々な分野からの切り口からなる議論により、「建築」、「関係性のアート」、「アートの機能」などいくつかのキーワードを手掛かりに、今後のプロジェクト型のアート活動における課題も見えてきた。

そして、多くの人々にわかりにくいと言われているアートに対して、「食べる、寝る、暮らすなど、人間の当たり前の行為から課題を考え、繋いでいく行為」という共通理解を示すことができたのではないだろうか。また、「楽しいとか、面白いとか、きれいだねなどのプラスの心の動きを体感していくことにより、アート活動はこの地域で継続できるものである。」という意見などは貴重なものであったと思う。

そこで、これからの松代のアートシーンを考えるときに、松代地域の固有性や歴史に裏付けられたものから出発し、そこに隠された課題に向き合うことを継続しなくてはいけないと考える。実は2000年に松代で土壁プロジェクトを始める時に私の中で漠然と考えていたことが、12年経ってやっと少しずつ整理され、言語化されてくることで、初めて多くの人たちと意識の共有や発信が可能になることがわかった。「人間の基本的な行為や日常性の意味の再発見」などに着目した活動であったにもかかわらず、このようなシンポジウムの機会をもっと早い段階で企画し、意識の共有化を図るなどの工夫があればよかったと反省している。

また、一歩踏み込んで社会と芸術の関係を見つめた時に、歴史の中の盲点を見つけ、繋いでいく意義を考え、そして行動していく時には、アートという概念を広く捉え、文化に近いものという定義で捉えなおすこと、すなわち、アートの概念崩しや新たな模索が大切であると考え。そして、人間は自然界の中の一部であるという視点に立ち、どうやって自然と共存し、自然から得た利益をどのようにいろいろな人たちと共有していくのかという仕組みづくりを再度考え直さないといけない時期なのではないだろうか。その新たな仕組みづくりのひとつがアートの大切な機能ではないかと気づかされた。

そのような側面からアートはどうやって自然と向き合うか、どうやって人と人との関係を作り直すかなど、現代社会が持たざるを得ない隠された課題に対する解答を導き出す場として必要とされる分野であることを、今回のシンポジウムで再認識できたことを報告の

最後に記しておきたい。

## 5. おわりに

ここでこのシンポジウムにパネリストとして発言された長岡造形大学の後藤哲男先生、鳥取大学の小泉元宏先生、松代在住の富澤恵子先生に改めて感謝いたします。また、このシンポジウムに参加してくださった鳥取大学の学生さん、長岡造形大学の学生さん、日本大学の鞍掛先生と彫刻科の学生さん、NPO法人越後妻有里山協働機構の高橋寛さん、松代地域で芸術祭に協力し、協働してくださっている皆様など、多くの人たちに支えられて成り立っているこのプロジェクト及びシンポジウムに対して深い感謝の意を表すものである。

---

## 参考・引用文献

- 1) 「ラスキンとモリスとの建築論的研究」白石博三 中央公論美術出版社 1993 p142~144